

	拡大常任 理事会担当	委員会名	委員長	令和2/3年度 課題と抱負 (50-200文字程度を目安にご記入ください)	令和2年度末 中間報告 (50-200文字程度を目安にご記入ください)
総務・企画・支部	北川	理事会	北川 昌伸	病理学会の発展をさらに促進するため、学会運営の多角化と内容充実化、学会総会の円滑な運営、学会会員の学術活動、医療活動、教育活動を支援する体制作り、などに関する議論を通じて方針を定めるとともに、各種委員会の活動を総合的に把握して統合を図る。	新型コロナウイルス感染拡大の影響でWeb会議を混じっての開催となったが、特段の支障なく進めることができた。予定に基づいて学会総会等の運営、各種委員会の活動を統合することができた。
	北川	倫理委員会	横崎 宏	・「患者の病理検体(生検・細胞診・手術標本)の取扱指針」(平成17年5月10日、日本病理学会、外科関連学会協議会)の改訂を行う。 ・日本医学会連合編「研究発表に当たっての共通倫理ガイドライン」の病理学会総会等における演題応募時倫理的手続きへの導入を検討する。 ・日本病理学会病理画像情報プラットフォーム事業の研究計画並びに実施に際しての倫理案件を審議し、事業の適切な遂行を監視・補助する。 ・病理学会会員、外部組織からの病理関連倫理事項の問い合わせに適宜対応する。	・病理学会ホームページ掲載「病理解剖遺族承諾書(モデル)」修正案の最終確認を行い、これを改訂版としてホームページに掲載した。 ・「患者の病理検体(生検・細胞診・手術標本)の取扱指針」(平成17年5月1日、日本病理学会、外科関連学会協議会)の見直しについて、継続審議を行った。 ・日本病理学会病理画像情報プラットフォーム事業計画におけるデータの企業利用について検討し、新規事業計画についての研究倫理審査を行った。 ・病理学会会員、外部組織からの病理関連倫理事項の問い合わせに適宜対応した。
	北川	COI委員会	大橋 健一	理事、各種委員会委員長等のCOI審査、managementについてなるべく迅速に、適切に進めたい。また、組織COIの在り方、managementについても検討を進めたい。	理事、各種委員会委員長、AIガイドライン委員等に対してCOI審査を進めている。AIガイドライン委員に対しては日本医学会、内科学会、外科学会の指針を参考にしている。
	北川	選挙管理委員会	落合 淳志	時限設置	
	落合	個人情報及び匿名加工情報取扱い委員会	伊藤 智雄	研究委員会の下で行なわれる研究事業等における個人情報及び匿名加工情報・非識別加工情報等の取扱いが適正に実施されるよう、監督、管理を行う。	中間報告までには特段の審議事項がなかった。今後とも適切に審議を行う体制を整備してゆく予定である。
	坂元	学術評議員資格審査委員会	池田 栄二	委員との密な情報交換のもと、学術評議員内規に基づいた公正で適切な審査を行う。審査を進めるなかで、改善すべき内規事項等があれば上部委員会に提起する。	平成31年度新学術評議員の推薦を受付中である。
	坂元	功労会員・名誉会員資格審査委員会	安井 弥	名誉会員は会員数の1%以内で選ばれており、今期も申し合せに添って審査を行なう。功労会員は、学術評議員歴20年以上を目安に申請資格として審査されており、本基準での審査を継続する。また、功労会員・名誉会員審査に関連する事項についても随時審議する。	「功労会員推薦の流れ」、「名誉会員推薦の流れ」および「名誉会員推薦に関する申し合せ事項」に則り、功労会員と名誉会員の審査・推薦を行なっている。
	坂元	企画委員会	坂元 亨宇	学会の発展に資する総務的な種々の事項を立案・検討する。 学会の将来構想、機構改革、その他の委員会に属さない重要事項につき検討する。	個人情報保護規則の策定に向けた課題、その他各種課題の検討を行った。
	坂元	男女共同参画・働き方改革委員会	橋本 優子		
	田中	単位電子化WG	田中 伸哉	2019年11月2日に第1回のWGが開催され、大きな方向性として、2022年の春の総会から単位の電子化システムを実働できることを目指すこととなった。以後、拡大常任理事会、広報委員会、専門医運営委員会、財務委員会など関係委員会と連絡を密にして進めていきたい。	現在は、希少癌の領域でe-learningで単位が電子化されているが、今後、このパイプラインをベースに単位の電子化を進めていくのが、拡大常任理事会、広報委員会と確認されている。具体的には事務局能力に限界があるため、分子病理専門医の認定が終了した3月下旬を目処に検討を再開する予定。
	田中	電子化機器・システム関連SWG	田中 伸哉	2019年9月12日事前聞き取りをマイスワン社から、10月4日には日本ユニシス社から行った。その後11月2日にWGが開催された。それを受けて11月25日に技術的な打ち合わせが行われた。実際の会員からのカード情報の読み取りの部分のRFID方式の機器についてイーガルド社、イーラーニング社から説明を受けた状態であった。その後新型コロナウイルス感染症のためIT関係の技術導入が大幅に進んだため、社会情勢をよく見ながらこのSWGは統廃合も視野にいれながら進めていきたい。	単位の電子化の検討が再開する予定の2021年3月下旬以降、具体的なシステムの洋式の検討に入り、見積もりをとり、運用体制の検討委員会と連携をとり、議論を深め進めていきたい。
	田中	電子化運用体制関連SWG	田中 伸哉	2019年11月の単位電子化WGの方針に従い、技術的なSWGが具体的な案を策定し、その後本SWGで実際の運用面の課題を洗い出し、解決策を探る予定であったが、分子病理専門医制度設計の実務が優先される都合上、本SWGは2020年春の総会前後に開催する予定を立てていた。しかし新型コロナウイルス感染症の蔓延により、中止となっている。今後は社会情勢をよく見ながら、関連委員会の動きに合わせてこのSWGは統廃合も視野にいれながら進めていきたい。	単位の電子化の検討が再開する予定の2021年3月下旬以降、機器・システム関連のSWGと連携をとり、議論を深めて進めていきたい。
	小田	病理診断・臨床検査あり方検討WG	増田しのぶ	医行為としての「病理診断」の重要性は普遍的ではある。一方、臨床法改正における「病理学的検査」の内容変更、「病理検査室」のISO認定取得、ゲノム医療の普及などにより、「病理診断」と「病理検査」不明確に扱われ、あるいは「病理検査」と「臨床検査」の棲み分けなどについて再考を求められる状況が生じている。「病理診断」「病理検査室」と「臨床検査室」の関係は、施設によって大きく異なっていると推察されるため、本WGでは、まずは現状把握を目指したい。	病理診断と臨床検査をとりまく社会状況が急速に変化している。医行為である病理診断の意義を守り、高めるために、現状における課題を明らかにし、対応策を考える必要が生じてきている。本ワーキンググループでは、まず、病理診断と臨床検査の現場における現状を把握し、課題を抽出することを目的とする。 テーマとして、①医行為としての病理診断、②ISO15189国際WGの動向、③米国におけるAP/CP、④病理部勤務の臨床検査技師の現状、⑤ゲノム医療の普及と課題などがあがっている。それぞれについて、情報収集と情報共有のために活動する。
	北川	登録衛生検査所等における「病理診断」に関する検討委員会	大橋 健一	新規	
	増田	支部委員会	鍋島 一樹	7支部の活動状況の共有を継続し、それぞれの事業の案内などを交換していきたい。「希少がん診断のための病理医育成事業」も各支部で好評で、継続して参加していきたい。各支部会での発表データなども、この事業のサーバーへのuploadと保存というルートができたので、今後はその運用について話し合っていく予定である。病理学会の病理医育成事業への寄与調査についても協力していきたい。結果を次の事業の参考としたい。	本年度は5月、8月にメール会議にて、各支部の状況報告を行い、特にWebによる支部会の開催方法などについて情報交換を行った。秋の委員会では、Web開催による支部学術集会での単位付与(領域別講習受講)に関して2021年度も継続してもらえよう病理専門医制度運営委員会へお願いした。また、病理学会に関して、各支部でなかなか世話人の引き受け手がなくなってきたという問題が指摘され、半数以上の支部から今後の継続について否定的な意見が出された。病理学会出席者の病理医になる率などを再検討し、継続審議することとなった。
	北海道支部		鳥越 俊彦	医学における病理学の重要性、医療における病理医への期待は日に日に増しており、これらに応えるためにも若手病理医のリクルートと教育、女性病理医のサポートは重要な鍵になります。また、形態病理学と分子病理学の融合、人工知能を応用した次世代病理学の開拓も重要な使命であると思います。誠実かつ着実に任務を果たし、夢を持って学会の発展に貢献したいと思います。	190回標準交見会:6月20日(土)、191回標準交見会:9月12日(土)、192回標準交見会:12月12日(土)、いずれもオンデマンド式WEB開催。193回標準交見会:令和3年3月6日(土)にオンデマンド式WEB開催の予定。第53回北海道医学大会病理学分科会:10月10日(土)ライブ形式WEB開催。希少がん病理診断講習会(小児腫瘍):講師孝橋賢一先生9月12日(土)、特別講演会:講師谷田部恭先生12月12日(土)、いずれもオンデマンド式WEB講演会実施。令和2年度北海道支部総会:10月10日(土)ライブ形式WEB開催。第17回病理夏の学校は来年度に延期。その他共催事業1件。
	東北支部		菅井 有	この度日本病理学会東北支部長として再度支部会のお世話をさせていただくことになりました。一期目におきましては支部会の先生方のご協力のもと支部会を円滑に運営させていただきましたことができました。支部会の皆様にはこの場を借りて厚く御礼を申し上げます。一期目では若手の先生の発表の中の優れた発表に対してアワードを設けました。これは若手に好評のようで、支部会の発表は熱気を帯びているように感じます。症例報告を行うことは医師の責務だと思いますので、アワード受賞者には受賞したことのみ満足せず論文文化することを促して行きたいと思っております。現代の病理学は大きく基礎病理学と病理診断学に分けられますが、最近の傾向としては、後者の病理診断学に進む方々が多いようです。その帰結として病理医の研究離れが最近指摘されています。確かに病理診断には興味を示すが、研究にはあまり積極的ではない、と言うのは自分の教室をみても感じます。しかし基礎的理解なしに病理診断学の進歩は望めないはずで、基礎病理学と病理診断学は互いに排他的関係ではなく、共生関係にあると考えるべきです。私は支部会の方々のご協力をいただきながら東北・新潟地方においても更なる研究推進の必要性を訴えて行きたいと思っております。このこと関係して診断病理への投稿も促していきたいと思っております。まずは「隼より始めよ」と言うことで、我々の教室から投稿をしていますが、各県の方々にも投稿を促進するようお願いしていきます。病理診断の教育活動も支部会の重要な任務です。病理診断に関しては地域にも有能な人材がいますので、その方々のご協力を得て病理診断教育の一層の充実を図りたいと思っております。特に若手への教育は各施設単独のみではなく支部会としてお手伝いできることも多いように思いますので、今後積極的に取り組んでいきたいと思っております。この際単なる組織診断の鑑別を要するのみではなく、その疾患の分子機序と組織像との関連性を意識することにより形態像の理解が向上することを強調したいと思っております。支部会の活動度は地域の活性化の指標になります。「地域から全国へ」の掛け声のもとに地域の底力を結集することが病理学全体の発展にもつながるものと思っております。今後支部会の先生方のご支援をいただき、有意義な会になるよう努めてまいります。最後になりますが、新型コロナウイルスの問題で心配な日々を過ごされていらっしゃるかと存じます。新しい治療戦略も提示されてきていますので、我々全員が希望を持って日々の仕事を続けることが必要だと思います。病理学会の会員の皆様のご健康、ご発展を祈念しています。	東北支部長として二期目も後一年となりました。昨年は新型コロナウイルス感染症のため、支部会を現地で開催することができず、夏の支部会は延期になり、冬の支部会も完全ウェブになりました。支部会の先生方と直接お会いできないのは残念ですが、昨今のコロナ事情では仕方のないことだと思います。昨年は医療機関におけるクラスター感染が多発し、普段患者さんと接する機会が少ない病理医も感染防御について考える機会が増えました。会員の先生方もご健康に留意されますよう祈念しています。さて東北支部会の今年度の活動は役員会をズームで一度開催しました(2020年10月19日)。今年の2月13日、14日に完全ウェブで冬の支部会を開催予定です。昨年の夏の支部会は延期になりましたので、2021年7月13日、14日に新潟大学大学院医歯学総合研究科分子細胞病理学分野近藤英作教授のお世話を、新潟市で開催予定です。開催様式については現在検討中で、ウェブ開催(もしくはハイブリッド)になる可能性もあると思います。コロナ感染の蔓延により支部会も十分な活動ができていない状況ですが、ワクチン接種などのより、普段の状況が一刻も早く回復されることを祈念しています。
	増田			コロナウイルス感染症の影響で支部学術活動は休止し、夏の学校も中止となってしまいました。感染の状況を見ながら10月からの支部学術集会の再開を目指しています。	10月に支部学術集会を対面とwebによるLive配信を合わせたハイブリッド方式によって行った。感染対策のため、大学外の一般施設を利用し、定員の1/3程を用いて行った。webでは50名程が常時視聴していた。参加者からは好評な意見が寄せられた。2月は当初ハイブリッド方式を計画したが、非常事態宣言の影響もあり、webのみで行う計画にしている。サマーセミナーは中止とした。
	関東支部		大橋 健一	夏と冬の交見会及び春のスライドセミナーはこれまで通り行います。一方で事務局の負担軽減も必要であり、標本の配布からVSへの移行や、夏の学校の在り方など、見直し可能なものは適宜変更を考えていきたいと思っております。	コロナの影響で夏の交見会は中止(世話人は来年夏に繰越)となり、冬の交見会は支部事務局主催でweb開催となりました。年度末のスライドセミナーもweb開催の予定です。事務作業で削減可能なものは随時削減しています。
	中部支部		村田 哲也		コロナの影響で夏の交見会は中止(世話人は来年夏に繰越)となり、冬の交見会は支部事務局主催でweb開催となりました。年度末のスライドセミナーもweb開催の予定です。事務作業で削減可能なものは随時削減しています。
近畿支部		横崎 宏	・これまで2年間の経験を元に、限られた支部財源を有効に使用しつつ支部会員の要望を取り入れながら4回開催する支部学術集会を中心に活動を進めていきたい。 ・支部学術集会時の託児サービスを含め、女性ならびに育児中の病理医の学術活動を積極的に支援したい。その際の受益者負担についても支部会員の意見を聞きながら検討する。 ・学生、初期研修医を対象にした夏の学校を今後とも継続し、支部内で稼働中の病理専門医研修プログラムや病理学研究現場の紹介など将来への人材確保の場として定着させたい。	・新型コロナウイルス感染症の蔓延により、5月に予定していた第89回支部学術総会を令和3年度に順延した。支部学術活動の継続のためオンライン会議システムを用いた学術総会を9月に第90回として試行し、多少の改善点はあったものの実行可能と判断し、12月に第91回をすでに大きなトラブルなく本開催し、本年2月に92回の本開催を予定している。 ・8月に予定していた近畿支部夏の学校も新型コロナウイルス感染症蔓延により令和3年度に順延、オンライン開催の方向で検討している。 ・支部学術集会時の託児サービス等にかかる受益者負担について支部会員に対しアンケート調査を行い、実施の方向で検討しているが、本年度は学術集会現地開催がなかったため引き続き検討の予定である。	

	拡大常任 理事会担当	委員会名	委員長	令和2/3年度 課題と抱負 (50-200文字程度を目安にご記入ください)	令和2年度末 中間報告 (50-200文字程度を目安にご記入ください)
総務・企画・支部		中国・四国支部	池田 栄二	年3回の支部学術集会、病理学夏の学校(10大学の持ち回りで本年度から3巡目)を開催する。学術集会における特別講演については、2回は専門医領域別講習の単位、1回は専門医共通講習の単位となる講演を予定している。また、支部学術集会時には、若手病理医の会の開催など、若手病理医が積極的に参加する雰囲気づくりを心掛ける。	新型コロナウイルス感染拡大の状況下、本支部ではWeb形式による支部活動基盤を確立し、令和3年1月15日時点で、これまで2回(6月20日、11月28日)の支部学術集会をWeb形式にて開催した。各々の支部学術集会では病理領域別講習会(うち1回は希少がん病理診断講習会)をプログラムに組み入れた。Web形式での支部学術集会については、大きなトラブルもなく概ね良好な評価を受けている。病理学夏の学校は、開催中止とした。
		九州・沖縄支部	鍋島 一樹	支部活動は順調なので、引き続き「若手病理医の会」の活動のサポート、updateされたテキスト・コンパイルの円滑な運用に取り組みたい。コロナウイルスのため、3月のスラコンは中止とした。今後も5〜6月に予定されているスラコン、支部総会、病理学校や学術講演会などの予定についても状況に応じて弾力的に取り組みたい。またこのような状況下で新たに生じる問題があれば支部会員で共有できるように取り組んでいきたい。	コロナの影響で、総会はメール審議で行い、7月以降5回の支部会はずべてWebによる開催となった。参加者は170〜200名ほどで通常の各県の開催よりも多く、内容も概ね好評であった。領域別講習の対象となる希少がん講習もWeb開催とした。病理学校については2020年度、2021年度ともに中止とし、支部委員会での話し合いを受けて、これからのあり方について、各県の担当者を含めて、協議することとなった。
財務・渉外	坂元	財務委員会	坂元 亨宇	学会の財務基盤の安定性が維持されるように努める。財務の視点から、学会の課題、将来構想を検討する。	特別資産申し合わせ策定など、財務基盤の安定に向けた施策を検討した。
	小田	国際交流委員会	小田 義直	順調に進んでいるシニア病理医による日独交流はそのまま継続。2020IAP/ESP Glasgowでの合同開催のために不規則になった日英シニア、ジュニア病理医交流は体制を立て直して継続。2020福岡総会で予定されていたESPとの交流事業はコロナのために中止となったが2021GutenbergでのESPでの交流事業を検討。同じくコロナで中止となったCSPとの交流事業も2021年に再開を目指して検討。秋の病理学会でのISP招聘国はIAP日本支部と連絡をとりながら決定してゆく。	コロナ感染拡大により国際交流事業は一時中断の状態にある。日英交流:2020年、2021年の英国ジュニアの日本病理学会(JSP)総会招聘は中止。2020年JSPジュニア(大江、藤原:敬称略)はGlasgowでのヨーロッパ病理学会(ESP)とIAP合同会議でオンライン発表。2021年増田理事をJSPシニアとして、2名のJSPジュニア(大島、山ノ井:敬称略)英国病理学会に派遣予定。日独交流:2020年笠原学術評議員をJSPシニアとしてドイツ病理学会に派遣(オンライン発表)。2021年ドイツ病理学会シニアのJSP総会招聘は中止。2021年ドイツ病理学会も中止JSPシニアとして落合理事を2022年ドイツ病理学会に派遣予定。ESPとの交流:2020年JSP総会へのESP病理医招聘は中止。2021年ESP総会へJSP中堅2名(大喜多、奥寺学術評議員)を派遣予定。日中交流:2020年、2021年のJSP総会への招聘は中止。2022年JSP総会招聘は未定。
学術・編集・研究	落合	学術委員会	落合 淳志	学術委員会の選定する各種賞(学術研究賞(A演説) 症例研究賞(B演説)、学術奨励賞、英国派遣候補者を決定する。総会の演題抄録の査読の方法を決定。	学術委員会の選定する各種賞(学術研究賞(A演説) 症例研究賞(B演説)、学術奨励賞、英国派遣候補者を決定する。総会の演題抄録の査読の方法を決定し、必要な内規の書き換えおよびホームページの更新を行った。
	坂元	編集委員会	坂元 亨宇	学会刊行物の編集・発信の安定した運営に努める。また、これらの一層の充実に向けた課題・改善策を検討する。	個人情報保護、著作権、所有権等の課題について検討し、規定の策定等に取り組んだ。
	坂元	PI刊行委員会	田中 伸哉	PINは2019年にはインパクトファクターが2.0を超え、年間110編の論文(総説9編、原著31編、症例報告41編)を出版してきた。初期判定までの所要日数は21日(中央値)で最終判定までは29日(中央値)である。今年坂元前編集長よりEICを引き継いだ、公平かつ迅速な判断を踏襲しPINの発展に寄与できるように尽力したい。	刊行委員の任期は2年間であるが、2020年12月末で、現在の委員の任期は満了となり、2021年1月1日から、新規・継続を含めて、あらためて刊行委員が推薦されて、承認された。コロナ禍のため、2020年の投稿数は440(前年310)と大幅に増加した。採択率は33%(前年35%)と大きな差はないものの、実質掲載論文が133編(前年104編)よりも増加した。
	坂元	PI常任刊行委員会	田中 伸哉	現在PINの刊行には、35名の常任刊行委員(Associate Editor)と175名の刊行委員(Editorial board)から構成されている。分野別に分かれており、迅速で質の高い審査が行われている。今年は任期満了となるため、継続や交代など、有効なシステムの維持に努めたい。	2021年1月1日から、2年間の任期で、常任刊行委員が着任した。また、現在査読領域は、24領域となっているが、その中で「病理技術」は投稿が近年ないことから、「ゲノム病理」領域に転換された。なお昨年から「AI・ITC」領域も新設されている。
	坂元	PI編集長・副編集長会議	田中 伸哉	現在、副編集長会議には、3名の副編集長と編集長で行われているが、急な対応や不測の事態への対応など、メールベースで円滑に機能している。特に今年は編集長が交代したため、一貫性のある編集の継続を維持する上でその存在は大きい。	これまで、副編集長は3名体制で運営されてきたが、2021年1月1日より、若い世代の副編集長が1名加わり4名体制となり、幅広い世代の会員の意見を取り入れながら運営してきたい。
	坂元	「診断病理」編集委員会	(安田政実)・牛久哲男	本誌「診断病理」は若手病理医にとっては症例報告の登竜門的存在であり—PINと同等/同質とは言わないまでも—当学会の機関誌として「役割」を担っていると考える。まずは、「役割」の一つに論文を日本語で「書く鍛錬の場」を提供していることがある。次に、とりわけ総説は新たな情報を発信し「勉強の場」を供している。今後、電子掲載版に転載する可能性が予測されるなかで、これらの「役割」が衰退しないような方策が考慮されるべきである。若手名の編集委員/副編集長が任期を完遂され、この春から新たな方々に加わってほしい。COVID19の影響は否めないが、新メンバーにもできるだけ早い時期から編集作業に従事してもらえよう、暫しオリエンテーションに努めていく。次年度に向けて交代が円滑に行われるよう、編集委員長候補としている方との引き継ぎ作業に取りかかり、同時に事務局担当者との連携も綿密に行っていく。	「診断病理」においては、コロナの影響はむしろpositiveに表れており、結果的に今年度は昨年の春以降、投稿数が確実に増加している。今後も「この状況」が継続することが望まれる。今年度で任期を終えられる編集委員/副編集長3名(草深・渡辺・松林先生)の後任の選出・依頼が進みつつある。加えて、編集長(安田)は8年間に及ぶ任に終止符を打ち、新たな編集委員長として牛久先生を迎えることに決定している。新体制への引き継ぎを円滑に行いたい。
	森井	病理専門医部会会報編集委員会	柴原 純二	例年通り、『診断病理』の発刊に合わせて年4回の会報を発行する。専門医制度に関わる最新情報を専門医の皆様に周知するとともに、各号の特集記事、各支部学術活動報告を含め、充実した内容を盛り込む。	『診断病理』誌上に年4回の会報を掲載している。専門医制度に関わる周知事項、特集記事、各支部学術活動を主な内容としている。
	坂元	剖検情報委員会	宇崎崎 宏	剖検情報を引き続き収集し、剖検情報としてまとめる。また蓄積された情報の検索サービスを提供する。ICD11の国内適用に対応できる様に準備を進める。	2017年分の剖検データを日本病理剖検情報第61輯として2020年分の刊行した。2018年分の剖検データを2020年12月までに集め、集計作業を進めている。ICD11は情報収集中。
	落合	癌取扱い規約委員会	落合 淳志	領域横断的がん取扱い規約の改訂作業を始める。また、日本病理学会からの病理医のICCRへの参加を推進する。	ICCRへの正式なさんかにより、ICCRからのData setが日本病理学会に来ることになった。その対応は、癌取扱い規約委員会の専門家に対応していただくシステムを構築した。
	落合	日本病理学会領域横断的がん取扱い規約検討WG	渡邊 麗子	2019年9月に発刊された「領域横断的癌取扱い規約」第1版の作成時に活動した内容をうけ、第2版作成にむけてより機能的に活動できる体制づくりを目指して発足した。「領域横断的がん取扱い規約」第2版作成の体制づくりに励み、および2年後の出版を目指す。	各がん取扱い規約で扱われているリンパ節の記載を網羅した、日本におけるリンパ節表記の標準化を目指した作業を展開している。月1回の定例Webミーティングを立ち上げた。
	落合	小児腫瘍組織分類小委員会	田中 祐吉	2018年から始まった希少がん病理診断事業を円滑に進めるように協働すると共に、新たな知見を含めた小児腫瘍病理診断の普及活動を継続して行い、小児腫瘍の病理診断の一般化をはかりたいと思ふ。	小児腫瘍症検討会を例年どおりの9月にオンラインで開催し、18症例につき呈示・検討を行った。その内容は、日本小児血液・がん学会雑誌2021年第1号に掲載予定である。また、希少がん病理診断向上事業として講演活動とE-learning用の作成を行いました。
	落合	病理診療ガイドライン作成委員会	落合 淳志	日本病理学会が作成する診療ガイドラインの適正な作成を行うための基盤の整備を行う。	AIガイドラインのためCOIの整備・評価委員会の設立などを行い、の適切なガイドライン作成のための組織体制を明らかにした。また、胃癌・乳癌HER2病理診断ガイドライン第2版の出版を行っている。
	落合	胃癌・乳癌HER2病理診断ガイドライン第2版策定WG	津田 均	胃癌・乳癌HER2病理診断ガイドライン第2版の完成、出版を行う。各学会のホームページにも掲載し、検査ガイドの改訂を広く周知する。	胃癌・乳癌HER2病理診断ガイドライン第2版の原稿を完成し出版社に送付した。転載料の案件が解決され次第、出版される見込みである。しばらくの間を置いたのち、各学会のホームページにも掲載されることとなっている。
	落合	同 乳癌サブWG	津田 均		「乳癌・胃癌HER2病理診断ガイドライン」が金原出版で出版準備中です。
	落合	同 胃癌サブWG	九嶋 亮治		
	落合	AIガイドライン策定WG	白石 泰三	年度内に病理AIガイドライン(仮称)を完成する。	法学系のセクションを含め、原稿が出そろい、当WGで編集作業を行っている。また、病理AIの医療機器承認に対しての基本方針を提言としてとりまとめた。
	落合	AIガイドライン評価委員会	真鍋 俊明	新たに新設された委員会である。AIガイドライン策定WGで作成されたガイドライン(案)を検討、評価することを目的としている。出来た草案を俯瞰的、多角的に分析、評価し、より実用的で、将来に渡って指針となり得るようなガイドラインができるよう手助けできればと考えている。	2021年3月半ば頃にAIガイドライン策定WGから草案が送られてくることになっている。送付され次第、まず委員各自で検討し、その後委員間で慎重に協議を重ね、最終評価、提言を策定WGへ回答できればと考えている。
	小田	ゲノム病理組織取扱い規約委員会	金井 弥栄	日本医療研究開発機構ゲノム創薬基盤推進研究事業等の要請に応じ、日本病理学会関連施設に併設されたバイオバンク等における試料品質精度管理に関する調査研究等を行い、ゲノム医療推進のための研究基盤整備に貢献する。	日本病理学会関連施設に併設されたバイオバンク等における、試料品質精度管理に関する調査を行い実態を把握した。がんゲノム医療の普及による診療機関併設型バイオバンクの普及に鑑みて、ゲノム研究用病理組織検体取扱い規程の中で改訂を要する項目を選定し、実証データを蓄積した。
	小田	ゲノム診療用病理組織検体取扱い規程策定WG	小田 義直	診療用取扱い規程自体の内容は既に確定しているが、研究用規程と連動して今後改訂の必要が生じて来れば対応を行う。規程の英文化はなるべく早く行う。	ゲノム診療用病理組織検体取扱い規程の英文化に取り組んでいる。畑中委員が中心となってdraft作成を行い、小田と桑田委員のチェックが終了。今後関係団体の代表者にもdraftのチェックを依頼し、英文誌への投稿を目指す。
	小田	検査医学会とのがんゲノム検査全般に関するガイドライン策定WG	佐々木 毅	2019年に臨床検査医学会とのアカデミア共同で、病理学会主導で「がんゲノム検査全般に関する指針」を発出することになり、2019年に臨床検査医学会理事長富裕氏と日本病理学会理事長北川伸氏との間で、契約書を交わした。2020年3月時点で、病理学会会員の委員、病理学会からの外部委託委員および臨床検査医学会からの現行のたつき台がそろったところであり、早期のパパコメの実施および発行を目指す。なお本指針は、アカデミア発の初めての「がんゲノム検査」に関する指針となるため、厚生労働省への提出も予定している。	臨床医学会との間で進めてきた「がんゲノム検査全般に関する指針」であるが、新型コロナウイルス感染症の拡大により、長く中断していた。現在、これまでで作成した原稿を、一般社団法人 日本生物資源産業界利用協議会に内容の精査をお願いし、こまごまが完了している。近く、臨床検査医学会との協議を再開する予定である。
落合	用語委員会	鳥越 俊彦	本委員会の意義と使命を自覚し、誠実・確実・迅速に任務を果たしたいと思ふ。歴代委員長を見習って、委員の皆様にはできる限り省エネモードで任務を果たしていただけるよう努力したいと思いますので、どうぞよろしく願ひいたします。	令和3年1月末日の時点で、依頼案件なし。令和3年3月26日から社会保障審議会統計分科会疾病、傷害及び死因分類専門委員会(ICD専門委員会)の委員を引き継ぐ予定。	
小田	研究推進委員会	豊國 伸哉	現在、癌遺伝子診断パネルを含む次世代シーケンス、再生医療、liquid biopsy、人工知能など、サイエンスの進歩を病理学も積極的に取り入れる事が基礎病理学ばかりでなく診断病理学でも強く求められるようになってきた。一方、新興感染症など病理学が対処すべき社会的要請もある。本委員会は病理学会会員に上記に関する最新の知識を伝達するとともに、若手における病理学研究に対する興味を深める事を目標とする。今まで好評を博してきたサイエンスと病理学を融合させた病理学会カンファレンスの益々の発展を含め、活動を進めてい所存である。	今年度はコロナ禍により日本病理学会カンファレンスは開催できなかったが、来年度はウェブ開催も考慮しながら開催の予定である。2021年の世話人は近藤英教授(新潟大)、2022年の世話人は古川徹教授(東北大)に決定している。2021年春の総会の分子病理診断講習会の講師を決定した。今年は多様性を重視して、炎症や糖尿病の話題も含めた。	

	拡大常任 理事会担当	委員会名	委員長	令和2/3年度 課題と抱負 (50-200文字程度を目安にご記入ください)	令和2年度末 中間報告 (50-200文字程度を目安にご記入ください)
学術・編集・研究	落合	研究委員会	落合 淳志	研究委員会が手掌する研究に関して適切な運営が行われているかを管理する。個人情報、匿名加工情報の取り扱いを適切に行う。	日本病理学会が主体となって行う研究(JP-AIDなど)に関する管理を行ってきた。
	落合	JP-AID事業	北川 昌伸	事業最終年度に向けてこれまでの活動の総括と更なる発展・継続的運用のための方策を探る。これまでの蓄積した多くのデータや開発したAIに関する活用方法についても引き続き議論して最善の成果が得られるよう努力する。	事業最終年度のまとめと今後の事業継続についての可能性に関する検討を開始した。医療情報学会との共同での検討も開始した。
	落合	JP-AID DB推進事業WG	倉田 盛人	新規	
	落合	JP-AID AI事業化推進WG	阿部 浩幸	新規	
	落合	希少がん病理診断支援検討委員会	佐々木 毅	国庫補助金事業である「希少がん診断のための病理育成事業」が令和2年度で3年目を迎える。3年目4回の本部主催の講習会、支部の協力を得て各支部で1コマの希少がん病理診断講習会を計画している。本部講習会ではこれまで、骨軟部腫瘍2コマ、脳腫瘍1コマ、小児腫瘍1コマの4コマ構成としてきたが、令和3年度は、骨軟部腫瘍1コマ、脳腫瘍1コマ、小児腫瘍1コマとして、残りの1コマに、悪性リンパ腫、血液疾患、頭頸部腫瘍、皮膚腫瘍などを計画している。また、令和元年度に初めて実施した、主として若手をターゲットとした、エキスパート育成講習会あるいはエキスパート画像検討会を、令和2年度も引き続き行うことを計画している。さらに、e-ラーニングのコンテンツに関しては、問題数を増やし、また骨軟部腫瘍、脳腫瘍、小児腫瘍に加えて、講習会で取り扱った悪性リンパ腫、血液疾患、頭頸部腫瘍、皮膚腫瘍などの作成も計画している。さらに病理専門医試験更新のための単位のみでなく、病理専門医試験の受験者に対してe-ラーニングの履修を必修講習とできないか、病理専門医制度運営委員会と連携して議論していく予定である。また、サーバにアップロードされた生涯教育コンテンツや病理情報ネットワークのコンテンツの活用も、生涯教育委員会や病理情報ネットワーク管理運営委員会および支部委員会と連携して行いたいと考えている。なお、本事業は当初3年間の事業の予定であったが、厚労省や財務省からの評価が高く、4年目以降の補助金の拠出もありうる可能性を示唆されており、4年目につなげるようさらに内容の充実を図りたい。	今年度から、新分野として、悪性リンパ腫、頭頸部腫瘍および皮膚腫瘍の3分野に参画していただき、当初の計画通り、6分野で講習会を開催した。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の影響で、講習会はすべてWEB開催となった。対面講習会では質問なども多数寄せられていたが、体面では、質問はメールのみでの受付となったため、聴講者に十分に理解が行き届いているか、若干不安であった。また若手の育成を主眼として、エキスパート画像検討会(育成講習会)は、脳腫瘍(委員長:柴原純二先生)で行ったが、非常に好評であり、エキスパートを目指したいという若手が発掘できた。なお、骨軟部腫瘍、小児腫瘍も今年度内に行う予定である。また、e-ラーニングに関しては、6分野から問題を募集し、問題と画像収集は完了した。病理学会のHPに掲載作業を進めている最中である。希少がん事業は、当初計画では今年度が最終年度であったが、これまでの業績が評価され、今後3年間継続予定であり、2021年度はこれまでと同じ国庫補助金が国の予算委員会で承認されている。
専門医認定・診療	森井	病理専門医制度運営委員会	森井 英一	専門医機構と連動しながら専門医制度を運用していく。また時代のニーズに合わせた新たな分子病理専門医の構築を図る。病理学会は先達のご尽力によって質の高い実施試験を行い国民が信頼できる病理専門医を輩出してきたと自負している。これまでの卓越した伝統と新たな工夫から生まれる研修システムを更にバージョンアップしながら質の高い病理専門医育成に向けたシステムの構築に全力で対応していく。	専門医機構と連動しながら専門医制度を運用していくとともに、新たに分子病理専門医の制度を開始した。感染対策が重要であるため、病理専門医試験のやり方を大幅に変更することを余儀なくされている。
	森井	病理専門医資格審査委員会/更新委員会	村田 哲也	専門医機構の動きを注視しつつ、資格審査と更新を行っていきます。本年度より更新はすべて専門医機構による更新となるため、部会報やHPなどを通じて周知を行います。	コロナの影響で東京への会議出張を自粛せざるを得なかった委員が出ましたが、資格審査・更新ともに順調に行いました。更新に関しては今年度からすべて機構更新となりましたが、更新申し込み者について大きな混乱はありませんでした。
	森井	病理専門医試験委員会	大橋 健一	新型コロナウイルス感染症の影響で専門医試験は延期されたが、情勢を見極めながら、適切な時期に試験をぜひ実施したい。	専門医試験は新型コロナウイルス感染症の影響もあり7月から9月に日時を変更して実行した。欠席者は例年よりやや多かったが、特に混乱はなく終了した。合格率は例年よりやや高かった。コロナ禍における来年度の試験の在り方、実施方法について議論した。学外の会場を用いて、バーチャルシステムを利用した試験を計画しているが、コストの面が最大の問題となっている。
	森井	病理専門医試験実施委員会	非公開		
	森井	病理専門医施設審査委員会	清水 道生	NCDが順調に稼働し、施設審査の時間がかなり短縮できるようになった点は非常に意義がある。しかしながら、削減数の減少は依然としてとまらず、認定施設A、Bの数も減少傾向にある。また、NCDの施設年報の期限の厳守がなされていない施設がみられるという新しい問題点も出ている。さらに本委員会の存続意義についても少し話し合いを進める必要があろう。	病理解剖数の減少傾向は全国的に継続しており、それに伴い施設認定の数は緩やかながら下降の一途を辿っているのが現状である。NCDの施設年報の期限に関しては、前年よりは守られていたようである。また、本委員会の存続に関しては、専門医機構が順調な動きを取り戻し、完全に委ねることができるようになるまでは継続して活動する必要があるとの認識に立ち、以前同様病理学会における独自の活動を継続していくこととなった。
	森井	病理専門医研修プログラム審査委員会	大橋 健一	2020年は小規模の改訂となるため、円滑に審査は進むと予想しています。次回の大規模改訂に備えて、体制の準備を進めていきたいです。専門医機構と密な情報の交換を行い、機構の変化に迅速に対応していきたいと思えます。	2020年は小改訂にとどまり、審査は円滑に行われた。特に問題は生じていない。コロナ禍における専門医研修の在り方、カリキュラム制による研修などの問題について他委員会とともに協議し、整備を進めた。
	森井	分子病理専門医制度運営委員会	落合 淳志	第1回分子病理専門医認定試験をR2年に行い、R3年4月1日より認定を開始する。また、次年度の認定試験のための講演会や問題作成を引き続き行っていく。	本年度第1回分子病理専門医認定試験を終了した。今年度中に認定者を確定し、来年度から日本病理学会認定分子病理専門医が正式に開始されることになる。
	森井	分子病理専門医研修委員会	増田しのぶ	本委員会では、分子病理専門医認定のための研修カリキュラムの策定、編集ならびに教材指定などについて検討する。	本委員会では、分子病理専門医認定のための研修カリキュラムの策定、編集ならびに教材指定を行い、現在改訂作業を行っている。
	森井	分子病理専門医資格審査委員会	佐々木毅	令和2年4月1日の「第1回分子病理専門医試験要項」の公示と同時に、「資格更新要件」も公示する。また、令和2年12月に行われる、第1回分子病理専門医試験の審査を、令和10月初旬より開始し、10月中旬をめぐって完了する。さらに第1回分子病理専門医認定者に関しては、更新資格の特例措置を設けるために、その周知徹底を図る。また令和3年度以降に開催する分子病理専門医更新講習会等にも具体的な内容等に関して、研修委員会などと連携して企画する。	当初の予定通り、第1回分子病理専門医試験が実施できた。資格審査委員会では、分子病理専門医試験の受験資格の検討や、提出された受験願書のチェックを行った。第1回分子病理専門医受験資格審査では318名の受験者に関して受験資格を認めた。なお、受験申請書類に関して、変更が必要な箇所(エキスパートパネル参加証明書)が見つかり、修正後に第2回分子病理専門医試験受験生用にHPにアップロードした。
	森井	分子病理専門医試験委員会	田中 伸哉	現在2020年末の第1回の認定試験の実施を目的に準備を進めている。今般の新型コロナウイルス感染症の拡大のため、講習会の日程が変更となっているが回数は減少していない。感染状況をよく見極めて、受験者に負担がかからないように配慮して、認定試験が終えることができるよう委員会として諸問題に対応していきたい。尚、具体的な問題の内容は委員長が非公開の試験実施委員会で作問が行われている。	2020年12月20日に、東京で試験を実施したところ326名の申し込みの内、コロナ禍のこともあり261名が受験した。2月現在採点が終了し、合否判定は運営委員会決定する見込みとなっている。平均点、分布などは概ね適切な内容だったと思われる。3月末までには、次年度の講習会開催に向けた新たなテキストの作成が予定されており、変更点を盛り込む形で、バージョンアップした適切な試験の実施に努めていきたい。
	森井	分子病理専門医試験実施委員会	非公開		
	森井	口腔病理専門医制度運営委員会	清島 保	“口腔病理学の発展ならびに口腔病理診断業務の普遍的な提供”について再確認を行う。引き続き口腔病理専門医制度の再点検、研修体制の充実化および内容の整備を図り、質の高い口腔病理専門医の育成に努めたい。併せて、地域連携による研修環境の整備、情報提供の拡充、口腔病理専門医間の連携などを実施し、口腔疾患の病理診断業務の社会的認知度が高められるよう努める。	“口腔病理学の発展ならびに口腔病理診断業務の普遍的な提供”についての再確認を踏まえ、口腔病理専門医の資格更新の改訂(移行期間基準設定を含む)を進めている。併せて、口腔病理専門医の専門的知識・経験に基づいた社会貢献や自らの知識・技能の向上に関して関連する委員会の助言・協力の上検討している。
	森井	口腔病理専門医試験委員会	豊澤 悟	全身疾患に対する幅広い知識を持って口腔領域を担当する口腔病理医の資格試験として、適切な出題範囲や内容等を検討して試験が行われるように図りたい。また、優秀な口腔病理専門医の育成につながるよう、各委員会と連携して試験関連事項を協議していく。	全身疾患に対する幅広い知識を持って口腔領域を担当する口腔病理医の資格試験として、適切な出題範囲や内容等を検討して認定試験を行えた。
	森井	口腔病理専門医試験実施委員会	非公開		
	森井	口腔病理専門医資格審査委員会	豊澤 悟	口腔病理専門医の試験資格と更新資格に関しては、細則に従って口腔病理専門医として適切な実績を明確にして審査を行う。なお、現在準備中の資格更新細則の改訂後は、新旧交替の過渡期に申請者が不利にならないよう適切な判断の下に対応したい。	口腔病理専門医の試験資格と更新資格に関して、細則に従って口腔病理専門医として適切な実績を明確にして審査を行えた。
	森井	口腔病理専門医制度基盤整備WG	長塚 仁	質の高い医療を提供する口腔病理専門医育成のための制度を検討する。歯科医療に貢献できる優れた口腔病理専門医の輩出のため、専門医試験制度や研修内容、資格更新基準等の内容について検討を進めていく。	歯科医療に貢献できる優れた口腔病理専門医の輩出のため、研修システムの在りかたや制度の検討を行っている。新たな資格更新基準策定に向けた検討を進め、口腔病理専門医制度運営委員会へ新基準(WG案)を提出した。
	佐々木	医療業務委員会	佐々木 毅	医療業務委員会では、関連する委員会との連携をとりながら、昨年度同様進めていく。また新型コロナウイルス感染症などの不測の事態に備えた、医療業務上のリスクマネジメントに関しても、関連する委員会と議論・連携することを計画している。	新型コロナウイルス感染症に関しては、国立感染症研究所とも連携して、関係委員会と連携しながら、病理検体の取扱い時の注意点や病理解剖についての感染予防策や注意事項を方針等を随時検討し、タイムリーにHPにアップロードした。
小田	コンサルテーション委員会	小田 義直	希少がん(骨軟部腫瘍、脳腫瘍)コンサルテーションのゲノム解析施設を集約して解析料を有料化するシステムを策定、運用して行き、実際に生じた問題に対応してゆく。小児腫瘍へのシステム拡大を検討する。希少がん病理診断のコンサルテーションの保険取扱いを想定したコンサルタントの選定基準等についても検討する。	骨軟部腫瘍および脳腫瘍の領域では特殊免疫染色や遺伝子解析を請け負う施設を選定し、その解析費用を依頼者に負担してもらうシステムを確立し2020年9月より実施している。現在までに大きなトラブルはない。今後このシステムを小児腫瘍領域にも適用することを検討している。コンサルト全領域のコンサルト料徴収についても検討してゆく。病理学会および国立がん研究センター、両者のコンサルテーションを今後どのように存続あるいは統合するのかについても検討予定。	
佐々木	社会保険委員会	佐々木 毅	2020年診療報酬改定に関する反省と、2022年診療報酬改定に向けての要望項目の整理を行う。なお、2020年診療報酬改定に関する周知や会員からの質問に関して、迅速に対応できるマニュアルやHPでの周知の仕方も検討する。	2022年診療報酬改定に向け、12月10日に内保連に1次案を提出した。提出にあたっては臨床細胞学会とも連携を取って行った。最終締め切りは2021年4月22日であるが、それまでに要望項目を再検討したい。	
佐々木	精度管理委員会	羽場 礼次	これまで精度管理委員会は、NPO法人日本病理精度保証機構や日本臨床衛生検査技師会など他学会との連携を強化し、病理診断の補助診断である免疫組織化学の精度管理を中心に情報収集や問題点を抽出し、その解決策を検討してきた。特に、NPO法人日本病理精度保証機構には、外部精度保証システムの評価者として協力を行ってきた。今後は免疫組織化学だけでなく、遺伝子パネル検査などのゲノム医療に対応した核酸品質の保証、日常業務である病理組織診断の保証に関しても検討し、その精度保証をNPO法人日本病理精度保証機構とも協力を行いながら実践していきたい。	1. 日臨技との連携強化を図るため臨床検査技師委員を一人増員した。 2. NPO法人日本病理精度保証機構の評価判定委員会が、12月12日と13日につくは臨床検査教育・研究センターで開催され、木佐貴委員、中井委員、中西委員を派遣し、協力を行った。	
佐々木	剖検・病理技術委員会	柴原 純二	剖検率の低下、若手病理医の経験不足など剖検に関わる問題点を把握し、具体的な対策を講じる。	『診断病理』誌上に掲載の総説の執筆、e-learning教材の構築など、病理解剖に関する教材の整備に取り組んでいる。	
小田	ゲノム病理診断検討委員会	小田 義直	羊土社から出版された「ゲノム研究用病理組織検体取扱い規程」と「ゲノム診療用病理組織検体取扱い規程」の合本のさらなる普及をめざす。内容に改訂が必要と判断された場合はその対応を行う。ISO15189における外科病理診断のガイダンス文書が国際的に策定されようとしており、日本病理学会からも意見を発信していく。国内での病理診断と臨床検査の関係をWGで把握し、今後の対応について検討してゆく。	ゲノム研究用取扱い規定については現在喫緊の改定を要する内容は無い。改定が必要となれば、対応してブラッシュアップする予定。FFPEのRNAに関するデータが必要との意見も委員から出てきており、今後の検討課題とする。ゲノム診療用規定については英文化を進めている。ISO関係ではドイツ病理学会からFFPE検体のゲノム解析等に関する国際規格案が本部に提出されており、パブコメの段階になれば本委員会から病理学会の意見を集約して対応する予定である。ISO本部による外科病理に関するガイダンス作成については鶴山委員を中心にその作成の是非と案について本部と密接な連絡をとっている。下部WGの「検査医学会とのがんゲノム検査全般に関するガイダンス策定WG」では佐々木WG長のもと検査医学会と共同で指針作成が進行中である。	
増田	診療関連死調査に関する委員会	大橋 健一	診療関連死調査に関する情報を委員の先生方と共有し、各支部を通して会員の皆様へ情報を提供していく。医療事故調査支援センターの協力担当者を各支部から推薦いただき、調査が円滑に進むよう協力していきたい。	診療関連死調査に関する情報を各支部、委員の先生方と共有し、各支部を通して会員の皆様に情報を提供した。医療事故調査支援センターの協力担当者を各支部から推薦し、調査が円滑に進むよう協力している。	
佐々木	AI・デジパソ・医療情報委員会	森井 英一	デジタルパソロジーに関するガイドラインの改定にむけて協議を進める。同時にAIをサポートシステムとする医療業務の導入を図るために種々の課題を議論する。	AIを病理診断支援システムとする医療業務の導入を図るために種々の課題を議論する。また、デジタルパソロジーに関するガイドラインの改定にむけて協議を進める。	

	拡大常任 理事会担当	委員会名	委員長	令和2/3年度 課題と抱負 (50-200文字程度を目安にご記入ください)	令和2年度末 中間報告 (50-200文字程度を目安にご記入ください)
広 報 ・ 教 育	田中	広報委員会	田中 伸哉	(1)会員システムについて、昨年度日本ユニシス社から突然バージョンアップの費用等非常に高額な請求が来た。今後日本ユニシス社を使い続けるかどうかは一度検討する必要がある。 (2)基本領域の専門医の単位の電子化が他学会では完了しているが、本会でも次の課題である。多くの委員会がかかわるため。昨年度単位電子化WGを立ち上げ、その下に電子化機器・システムSWGおよび電子化運用体制関連SWGの2つのSWGを立ち上げた。しかしながら今般のCOVID19の問題で、一時的に一気に有事のOn-Line化、電子化が進んだ。今後は様々な状況を良く見ながら、関係各所と連携して無理なく平時の電子化へと繋げていきたい。 (3)ホームページについては内容の更新は順調である。サーバーの設置場所の変更、バージョンアップなどが今後の課題である。(4)社会への情報発信委員会として、昨年までHANSHIN健康メッセに従来どおり参加したところ多くの市民の参加が得られたが、今般の影響から、健康メッセ自体のOn-line化の議論が進んでいる。	(1)会員システムのバージョンアップは理事長に相談いただき適切な価格で更新ができた。今後は2021年4月以降、単位の電子化に向けた改良が必要となる。そのためのワーキンググループが設置されているため、連携しながら進める。(2)ホームページを設定しているサーバーも外部サーバーに移行できた。このことで全ての会員が容易にアクセスが可能となった。(3)社会への情報発信委員会関連では、HANSHIN健康メッセオンラインが開催され、特に病理のコンテンツはアクセス数が多いことが確認された。また、学生のSNS使用頻度が高いことを踏まえ、病理専攻医を増やすため、病理学会公式ツイッターを開設することが検討されている。(4)ホームページについては、バナー広告の申し込みが数件あった。
	田中	社会への情報発信委員会	森谷 卓也	市民向けの、病理診断に関する動画の作製を完成する。病理学に関するパンフレットの改定を行う。HANSHIN健康メッセの出版を継続する。新たな情報発信の手段とコンテンツについて検討し、実現に向けて努力する。	新型コロナウイルス感染症のため、動画撮影は延期(再開未定)。HANSHIN健康メッセはウェブ開催され、無事に終了した。新たな情報発信の手段としてTwitterの利用について検討中である。
	坂元	病理情報ネットワーク管理運営委員会	宇於崎 宏	病理情報ネットワークセンターの新URL (https://e-learning.pathology.or.jp/)での新サイトを安定的に運用する。またその周知、活用を図っていく。	新サイトは順調に運用している。複数での支部会や研究会、小グループでの利用があった。パブリックコメントの募集やコロナ禍での学生実習での活用も試みた。
	増田	教育委員会	増田しのぶ	病理医にとって教育は、診療や研究とともに最重要課題である。しかし、医学・医療の本質が科学的、倫理的視点からは不変であるものの、技術的方法論による裏付けを必要とする応用科学としての側面を有しているため、医学教育の内容は時代とともに質的量的に増加している。病理医としての教育は、臨床現場においては実践的知識や診断技量の向上が求められ、学問としては病態生理や形態に即した研究を指導する必要がある。さらに、医学教育そのものがグローバルスタンダードによる世界中の均等化や新しい方略の導入など進化を続けている。病理学の教育がどのようにあるべきか、一方では診療現場での実践力を体系的に組み込み、他方では病因論を進化させ続ける必要がある。本委員会においては、卒前卒後教育のシームレス化の議論とともに、教育の現状把握と情報共有、さらには教育現場に役立つ情報発信を心がけたい。	2020年はCOVID19感染拡大予防、教育現場には大きな環境の変化が生じた。2016年教育委員会が行ったアンケート調査により、各学年における病理学教育の現状を把握した。 COVID19感染拡大にともない、各大学がどのような創意工夫を行ったのか、現状と課題を把握するためのアンケート調査実施を計画している。 また、病理コア画像に「病理のための正常組織」を追加する作業を進めている。
	増田	病理医・研究医の育成とリクルート委員会	都築 豊徳	医学生対象の東京レジナビ参加により人材の確保を目指したいと思えます。併せて、医師・歯科医師の大学院生が対象の病理学研究新人賞選考と中心にして、研究を志向する人材の育成を目指したいと思えます。前期研修医から病理医への興味が増えることが多いため、この年代に対するアプローチを考えていきたいと思えます。	COVID-19の蔓延状況から、2021年にはレジナビの参加を見送ることとなった。Webによるレジナビの提案が業者より行われた。内容を勘案すると、対費用効果が乏しいと判断され、こちらも参加は見送りとなった。2021年に具体的なリクルート運動が難しい状況である。日本病理学会100周年記念病理学研究新人賞については、事業が継続されることとなった。2021年に関してはWeb形式での発表を行い、審査を行う事となった。
	増田	病理診断講習会委員会	坂谷 貴司	2021,2022年の総会時に行う病理診断講習会における講習会内容の策定およびハンドアウト作成を行う。提示症例のWSI化など生涯教育コンテンツとしての基盤作りを行ってきており、会員に周知するなどして活用を促したい。さらには一定期間を経過したハンドアウトをpdf化するなど、内容充実を図ってきたい。	第110回総会(2021年)における病理診断講習会の準備は順調に進んでいる。第108,109回の提示症例のWSI化、PDF化したハンドアウトの病理情報ネットワークサイトセンターへの掲載も予定どおり進んでいる。昨今の現状下、講習会内容がオンデマンド配信となっており、音声付きファイルを作成いただいているが、これらのコンテンツ化についても検討していきたい。
	増田	海外研修委員会	黒瀬 顕	ハンガリー、ゼンメルワイス大学との提携による病理解剖研修コースは5回を終え準備や研修方法は確立した。5日間で9体の病理解剖とレポート作成という濃密な日程であるが、毎回、剖検例は症例の偏りなく選択され指導陣の教育法や熱意も卓越している。研修後のアンケートでは参加者の高い達成感が毎回見て取れる。今後は研修参加後の付加価値(研修への同行やガイド、参加者同士の交流など)を高めること、さらに応募者の多くが参加出来るような体制を考えていきたい。ハンガリーでは病院死亡例は基本的に剖検が課せられるため剖検手技や剖検報告の作成が系統立っており、さらに病理は医療の最終検証的役割を持つ点が顕著である。本研修は剖検数獲得ではなく、かかる伝統的に剖検が重視され医療における病理の役割自体の異なる国に出向いて実際に剖検とレポート作成を行い、それを病理医のキャリアに生かすことが目的であり、このような貴重な機会を病理学会が提供している意義を発信し続けたい。	新型コロナウイルス感染の世界的蔓延により2020年度研修コースは中止とし、2020年3月にその旨を参加決定者4名に通知した。次回開催の折には今年度の参加決定者から希望がある場合、病理専門医未取得で規定剖検体数に足りない場合には優先的に選考することとし、その旨も通知した。2021年度研修コースに関しては2020年9月、ゼンメルワイス大学の責任者であるグラス先生の意向も踏まえ、状況の著しい改善が認められない内は研修を企画せず応募も行わない旨を決定し、その旨を病理学会ホームページに掲載した。
	佐々木	生涯教育委員会	鬼島 宏	会員(病理医)が生涯にわたって自らの知識を広げ、技能を磨き、常に研鑽することが出来るような効果的な生涯学習制度の基盤を継続的に確立する。日本病理学会サーバーの「生涯教育サイト」内に整備された。A) 専門医資格更新様式、B) 生涯教育 e-learning、C) 病理診断講習会の提示標本WSI化と解説、D) 剖検講習会の提示標本WSI化と受講全の課題、E) 分子病理専門医講習会(案内)をさらに充実させる。さらに、e-learningシステムを本格的稼働し、「生涯教育サイト」全体を包括的に運営してゆく予定である。	日本病理学会サーバーの「生涯教育サイト」内に整備された。A) 専門医資格更新様式、B) 生涯教育 e-learning、C) 病理診断講習会の提示標本WSI化と解説、D) 剖検講習会の提示標本WSI化と受講全の課題、E) 分子病理専門医講習会(案内)を充実させている。生涯教育e-learningでは、病理専門医試験過去問題WSI化を行っている。病理診断講習会では2019年度ハンドアウトがPDFで掲載された。
	増田	診断病理サマーフェスト委員会	菅井 有	サマーフェスト委員会委員長として2年間活動してきました。これまでの委員会の円滑な運営にご協力いただいた委員の先生方に厚く御礼を申し上げますと同時にご参加いただいた方々にもこの場を借りて御礼申し上げます。サマーフェストは単なる病理診断の講習会ではなく、臨床医と病理医との対話を通じて新しい病理診断の構築を目指すことを主な目的としています。これまで臨床医との合同の症例検討会は多くの学会や研究会で行われてきましたが、系統的な疾患について病理医と臨床医が合同でその疾患の診断・治療における最新の知見をレビューする会は本会が最初であり、これまでこの学会、研究会でも行われていない病理学会独自の試みです。実際参加する方々の専門をみても病理医が多いですが、放射線科医、その他の臨床医など多くの専門科の医師が参加しています。本会の役割や特色が多くの臨床科から支持されている証左と思えます。今後本会を通じて病理医、臨床医の対話の重要性を強調して行きたいと思えます。今年のサマーフェスト(呼吸器疾患・元井紀子世話人)は東京オリンピックの影響を避けるために神戸大学伊藤智雄教授のお力をお借りして9月に神戸市で開催予定でしたが、新型コロナウイルスの影響で開催が危ぶまれています。もし延期が決定された場合は、来年の秋に東京で開催することになりそうです(東京オリンピックの延期開催のため)。現在緊急事態宣言の真っ只中で、多くの学会、研究会が中止もしくは延期されています。学会、研究会は三密の代表例とされているのがその理由とされています。しかし一方で十分な予防措置を講じることで開催の可能性を探る動きもあるようです。新型コロナウイルス感染症は今後も小さな流行が繰り返されることが指摘されており、完全な安全を保証することは困難です。学会、研究会の自粛をどのように緩和するか今後の大きな課題と思えます。我々専門家による独自の対策が必要かも知れません。最後に病理学会独自の試みである病理診断サマーフェストに対して今後とも変わらぬご支援をお願い申し上げます。	今年度はコロナ感染禍で、サマーフェスト開催も大きな影響を受けました。神戸大学の施設で開催予定でしたが、最終的には2020年の夏の病理診断サマーフェスト(世話人:国立がんセンター元井紀子先生)は10月3日から約一ヶ月間完全ウェブ(オンデマンド方式)にて開催されました。470名の参加者の応募があり、例年より参加者が増加しましたが、これもオンデマンド方式による聴講方式(約一ヶ月間)が支持されたためと思われる。参加者の意見も好評価であったようです。決済書類の作成が遅れていますが(2月初旬には完成の予定と聞いています)、相当額の残余金が発生したのと思っています。今後はコロナ感染状況が続くことが想定されますので、来年度のサマーフェスト開催(10月30日、31日)様式も熟慮する必要があります(夏頃をめどに決定の予定)。
	小田	ゲノム病理標準化講習会委員会	(増田しのぶ) 一金井弥栄	ゲノム診療を取り巻く環境の急速な変化に伴い、病理が担う役割も格段に広がり深さを増している。ゲノム病理標準化講習会委員会は、ゲノム病理標準化講習会の企画、運営を担う。病理医のみならず、病理検査技師、臨床医を対象に、ゲノム診療における適正な病理検体取扱の理解を促すことを目的とする。今年度は令和2年8月(予定、東京)、10月(大阪)、令和3年2月(東京)の3回の講習会を予定している。	2018年にゲノム標準化センターから日本病理学会が継承して行ってきたゲノム病理標準化講習会は、病理専門医、分子病理専門医受験資格要件の一つの講習会として、2021年2月第9回の講習会が開催された。 次年度からは、ゲノム医療の保険診療に関する部分は、分子病理講習会に吸収され、ゲノム研究用病理組織検体取扱規程内容の解説を中心に行う。本講習会内容は、引き続き、分子病理専門医の研修カリキュラム(Basic編)に位置づけられ、また「ゲノム研究用病理組織検体取扱規程」は、分子病理専門医受験の教材として位置づけられる。